

発行者

北海道へき地・複式教育研究連盟
www.hamanasu.com./dohekire

委員長 田中 和 敏
 編集責任者 古田 統
 印刷所 株式会社ビジネスサポート
 虻田郡豊浦町字東雲町48-18 TEL0142-82-3313
 題字 書家 濱谷 彩鶴 (はまや さいかく) 氏

第64回

全道へき地複式教育研究大会
 宗谷大会特集号

最北の風薫る宗谷の海と大地に生き

未来を担う子らに

豊かな心と確かな学びを!

最北の地宗谷から新たな一歩を

北海道へき地・複式教育研究連盟委員長 田 中 和 敏



「最北の風薫る宗谷の海と大地に生き 未来を担う子らに 豊かな心と確かな学びを！」を大会スローガンに、第64回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会を9月17日・18日に開催いたしました。清々しい秋空のもと、全道各地より600名を越える参加者を迎え、充実した大会とすることができました。

宗谷では平成13年度第50回大会以来14年ぶりの全道大会の開催となりました。この14年間のへき地・複式校を取り巻く環境は大きく変わりました。第50回大会では10市町村16会場で分科会が開催されましたが、本大会では8市町村9会場での開催となり、大会規模の縮小は顕著なものとなっています。

そのような中、本大会は「オール宗谷」での発信を合言葉に、宗谷管内すべての小中学校に協力いただいた開催となりました。

分科会の内容も多様なものとなりました。

市町村内の学校が一体となった取組の公開、市町村の教育研究団体との共同開催などは、加盟校減少の中、研究の深化・充実に向けた新たな手立となる可能性を感じさせるものでした。

複式理科の公開では、喫緊の課題である理科の学年別指導について熱心な協議が行われました。集合学習の公開では、小規模校の隘路克服を目指した先達の取組とその有効性を再確認するものとなりました。

初日の分散会も2年目の取組となり、全道の優れた実践の交流の場として定着し、大会の幅を広げ、一層充実したものとすることができました。

このように、宗谷大会は、研究の成果はもちろん、運営の在り方、研究の視点など、今後の活動に大きな示唆を与えてくれるものとなりました。

また、渡島プレ大会も、八雲町から松前町までの6市町9会場で、へき地・複式の強みを生かし、子どもの変容に重点を置いた教育実践を公開し、盛会のうちに終えることができました。

これから、両大会の成果と課題を整理し、次年度の第9次長期5カ年研究推進計画『実践研究・検証期』のまとめに向けて、より一層研究実践の充実につなげてまいりますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

結びになりますが、両大会の開催にあたりまして北海道教育委員会をはじめ多くの教育関係機関・団体にご指導ご支援いただきましたことに心より感謝申し上げます、道へき・複連情報154号発行にあたってのご挨拶といたします。

第64回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会を終えて



北海道教育庁宗谷教育局
局長 岡村 眞規子

実りの秋、海と大地の恵みあふれる最北の地、宗谷で、第64回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会が、全道各地から約600人もの先生方をお迎えし、成功裡に終わりましたことに、心からお祝いを申し上げます。

北海道へき地・複式教育研究連盟におかれましては、「へき地」「小規模」「複式」の特性を生かした実践的な研究を積み重ねるとともに、毎年、その成果を全道に発信する研究大会を開催し、本道のへき地複式教育に多大な貢献をされておりますことに、深く敬意を表します。

また、授業公開や研究発表をされた9つの会場校はもとより、まさに「オール宗谷」で全道からの参加者を「おもてなしの心」で迎えていただいた宗谷複式教育研究連盟には、昨年度のプレ大会からの長きにわたり御尽力いただき、深く感謝を申し上げます。

さて、今日、学校教育においては、子どもたちが、他者と協働しながら切磋琢磨する中で、自ら未来を切り拓く力を身に付けさせることが求められております。

特にへき地・複式教育では、その特性を踏まえ、子ども一人一人の可能性を引き出すとともに、仲間と協力し、互いを高め合う集合学習等の教育活動を充実させるなど、子どもの学習をより豊かにすることが大切です。

このような折、「最北の風薫る宗谷の海と大地に生き未来を担う子らに 豊かな心と確かな学びを！」をスローガンとした本研究大会では、子どもが主体的に学ぶための学習過程や思考力・判断力・表現力等を育む言語活動の充実、ICTの活用など、ふるさと宗谷に生きる子どもたちの確かな学びを築く指導の在り方について提案され、大きな成果を収められたと伺っております。

今後とも、各学校におかれましては、北の大地で生き生きと活躍する子どもたちの育成に向け、これまで積み上げてこられた研究成果を踏まえ、本道のへき地複式教育の更なる飛躍に向け、邁進されることを御期待申し上げます。

結びに、北海道へき地・複式教育研究連盟並びに宗谷複式教育研究連盟のますますの御発展と会員の皆様の御健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



「第64回全道へき地複式教育
研究大会宗谷大会」
実行委員長 井村 雅彦
(稚内市立大岬小学校長)

「最北の風薫る宗谷の海と大地に生き 未来を担う子らに 豊かな心と確かな学びを！」を大会スローガンに、9月17日・18日の2日間開催されました、第64回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会に、全道各地より約600名の参加を頂き、盛大に開催できましたことに心より感謝申し上げます。

全道大会は、14年ぶりの大会でしたが、前回大会とは複式校の減少や学校数の減少により実行委員会体制づくりも大変厳しいものがありました。そのような中でも各市町村に実行委員会を組織すると共に、連携会議より管内研究大会という位置づけもあり、管内あげて「オール宗谷」として様々な協力・支援を頂きながら研究大会を運営することができました。

1日目の全体会では会場を文化センター小ホールに変更し150名の参加者のもと、開会式、分散会が実施されました。分散会Ⅰでは、「学校・学級経営」、分散会Ⅱでは、「学習指導」に關係した提言と協議が進められ、複式校以外の先生方にとっても今後の学級経営、学習指導の参考になったのではないかと思います。

2日目は、宗谷管内各市町村で9分科会の公開授業が実施されました。礼文会場では「保小中高連携10周年」という節目の年となり、町をあげてのお誘い活動を取組、100名を超える参加者があったと聞いています。

どの分科会でも若い先生方の若さ溢れる授業が中心となり、宗谷らしい授業づくりや、子供の活動の様子を参観して戴いたのではないかと思います。

また、道へき複連の第9次長期5か年研究推進計画の2年次として、「学校・学級経営の深化・充実」「学習指導の深化・充実」の課題に向けて、保護者・地域との連携や学校づくり、ICTを活用した授業展開、1人学級の学習展開等、宗谷らしい課題解決に向けての授業展開を発表できたのではないかと思います。

2年前のプレプレ研から本大会までの約3年間に渡る取組に、分科会を担当して頂きました学校職員の皆様に心より感謝申し上げますと共に、本研究大会実施に向けご支援ご協力頂きました、北海道教育委員会、北海道教育庁宗谷教育局、北海道へき地・複式教育研究連盟、各市町村教育委員会、各市町村実行委員会の皆様、教育関係者の皆様に、心より感謝とお礼を申し上げ、挨拶といたします。

基 調 報 告

第64回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会
研究部長 浅野 孝一



【宗谷の歩み】

昭和23年に宗谷単複式教育連盟が発足し、昭和58年に現在の「宗谷複式教育研究連盟」が誕生した。

平成13年に第50回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会が開催され、へき地・複式教育の充実・発展に役割を果たしてきた。

【現状とこれまでの研究】

宗谷管内の複式校の割合は約42% (25校/全60校) で、課題は、へき地・複式校に勤務する教職員の年齢や経験年数が低いため、日々の実践課題を解決するのが難しいことである。

解決策として、宗谷複式教育研究大会で、授業公開・3分科会でのレポート交流・若い教師のための実践講座を実施し、研修を重ねてきた。複式授業の課題を間接指導と押さえ、『自学自習』の姿勢をどう育てるかという視点で研究を深めてきた。

活動方針は、“へき地・複式校が持つ「へき地」「小規模」「複式形態」の特性を生かした宗谷ならではの複式教育の充実をめざして研究活動を推進する”などの3点である。研究推進の方向性は①研究活動を進め、実践を積み重ね、さらなる成果と財産を生み出す②地域に開かれた学校研究と研究大会組織の運営改善を図る③保護者・地域に支持される研究大会をめざす④自主的な活動が保証され、共同財産が生まれる方向を目指す⑤近隣市町村の支援体制を確立する準備を進める…である。

宗谷の特色は、第1分野「学校・学級経営の深化・充実」の目標である“地域の教育課題を踏まえ、家庭・地域と連携し「豊かな心」を育てる学校・学級経営の創造”にとりこんできたことである。保護者・学校・地域が連携して一緒に子育てに取り組む「子育て運動」や子供の発達が滑らかに接続するように「幼保小中高の連携」を深めてきた点である。

【研究主題】

「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを切り拓く子供の育成」

～へき地・複式教育の特性を生かし、児童生徒一人一人に未来に『生きる力』をはぐくむ学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

【大会スローガン】

「最北の風薫る宗谷の海と大地に生き
未来を担う子らに 豊かな心と確かな学びを！」

【宗谷大会の方針と研究内容】

宗谷大会の方針は、5点である。

①オール宗谷で学びの場をつくる大会に②全道に宗谷の教育を発信する大会に③子供の現実から出発し子供に返す大会に④創意工夫による低コストの大会に⑤ICTの活用で時間と空間の壁を越える大会に

宗谷管内では、学校や地域の特性を踏まえ、地域に根ざした学校・学級経営の深化・充実を大切に、実践に取り組んでいる学校が多い。学校研究では、学力向上をめざして小規模・複式学級における学習指導の深化・充実について実態に即した研究に取り組んでいる。

宗谷のへき地・複式教育は、地域に根ざした学校・学級経営を土台にしながら、各学校の独自性を尊重して、多様な研究を集約している。「学校・学級経営の深化・充実」と「学習指導の深化・充実」は、へき地・複式教育研究の両輪である。各学校の実態に応じて、研究・実践した成果を蓄積することで、第9次長期5か年研究推進計画に資することをめざしている。

宗谷大会は、各学校が設定した研究主題による研究を大事にしながら、第9次長期5か年研究推進計画との関連を図るとともに、プレ大会で明らかになった成果と課題の検証を図る。これまで築いてきた「オール宗谷」で取り組む宗谷ならではの複式教育のよさを生かし、さらなる充実・発展を目指している。

【むすびに】

宗谷大会開催にあたり、多大なるご支援・ご助言をいただきました北海道教育委員会をはじめ、北海道教育庁宗谷教育局、北海道へき地・複式教育研究連盟、宗谷管内教育委員会連絡協議会、各市町村教育委員会、宗谷管内教育連携会議等、各教育関係団体等の皆様に心から感謝申し上げます。

分 散 会

【学校・学級経営分散会】

「やる気」「元気」「根気」「勇気」の
4つの「き」を育てる学校経営
～家庭・地域との連携、協力、小中連携事業を窓口に～
赤井川村立都小学校 校長 志田 純一

■提言概要

「目指す児童の姿が具体的に見える重点目標を掲げ、様々な機会や場を通して周知し、信頼される学校を目指す」として、『「やる気」「元気」「根気」「勇気」の4つの「き」を育てる学校経営』を研究主題として、連携を切り口に研究を推進している。

成果としては、重点目標が次第に浸透していったことや、PTAとの行事等を実施する際にも重点目標を意識して取り組むことで、大人が子供の成長する姿を共有することができた。そのため、保護者と教職員のコミュニケーションが円滑になり、学校学級経営により影響を与えた。さらに、小中連携では、関係者の共通理解を図りながら進めたことなどがあげられた。

課題は、保護者の中に考え方の違いが出てきて、現在の協力体制を継続することが難しくなっていること。村内学校連携では、中学校卒業時の子供の姿を共有することが必要であること等があげられた。

■研究協議

討議の柱を「質の高い教育活動を展開するためには、どのように地域や学校種間の連携を活かし、学校経営を推進していったらよいか。」として、小中学校間やPTA等との連携について協議した。

助言者からは、連携を通して相互理解を深めたり様々な段階におけるシステムをつくったりする必要のあること。学校・地域・保護者で15歳時の子供の姿を共有することが大切であるなどの講評をいただいた。

【学習指導①分散会】

見通しをもち、筋道を立て、
共に学び合う子どもの育成
～算数科における問題解決的な学習の工夫を通して～
石狩市立厚田小学校 教諭 苗加 大輔

■提言概要

研究仮説を「①問題解決的な学習過程を明確に、問題や課題、教材などを工夫することにより、児童は課題意識をもち、主体的に問題解決に取り組むことができるようになるだろう。②問題解決場面において、互いの考えを交流し合う場面づくりや、考えを整理するノートづくりなどの工夫をすることにより、児童は自分の考えをもち、互いに伝え合い、考えを広げ深めることができるようになるだろう」として研究を進めた。

成果としては、問題→課題把握→自力解決の見

通しの一連の流れをスムーズに行えたことで間接指導が充実したこと。子供の思考状況に応じてペア交流や全体交流を取り入れ理解を深めたことなどがあげられた。

課題としては、本時の目標や既習との違いを明らかにして問題や課題を設定することや、児童の思考の流れなどを考慮した単元指導計画の工夫等があげられた。

■研究協議

討議の柱を「課題意識を持って主体的に学習に取り組ませるためには、どのように言語活動や話し合いの手立て等を工夫し、授業づくりを進めるとよいか。」として協議を進めた。具体的には、課題把握の在り方、ノート指導、学習過程の時間配分、学年差や集団差の解消を図る工夫等について意見が出された。

助言者からは、①見通しをもたせる授業のよさ②教材の設定と工夫③振り返りを通して学習内容の定着と学習意欲の向上を図ることについて講評をいただいた。

【学習指導②分散会】

進んで人とかかわり 思いを伝え合う子どもの育成
～対話を通して学びを創造する
国語科の授業づくり～
芽室町立上美生小学校 教諭 佐藤 圭司

■提言概要

研究仮説を「子どもたちと学びの共有化を図り、対話する場を設定し、共感・実感・学び合いのある授業づくりを行うことで、進んで人とかかわり、思いを伝え合う子どもを育成することができるであろう。」とし、「学び合う子どもの支援」「学び合いを促す言語活動」の2つの視点から研究を推進している。

成果としては、ペア学習やグループ学習を効果的に取り入れたことで、対話する力を高めることができたこと。学習リーダーのシステムを取り入れ、子供たちだけで対話が成立する手立てを講じたことで、学習意欲も高まり主体的に学ぶようになってきたことがあげられた。

課題は、子供たちだけで学習を進めた場合、学習の目標や課題とのずれが生じやすいことや、学習リーダー中心の授業の質をどのように高めていくかなどについてあげられた。

■研究協議

「課題意識を持って主体的に学習に取り組ませるためには、どのように言語活動や話し合いの手立て等を工夫し、授業づくりを進めるとよいか。」を協議の柱として、対話や話し合いの仕方の指導、見通しと振り返り等について意見が出された。

助言者からは、3年間の国語科研究の成果を新たな算数科研究にも生かすことが大切である。また①言語活動の充実②見通しと振り返り③目標の実現の3点について講評をいただいた。

各分科会報告

〈第1分科会:猿払村立浜鬼志別小学校〉

1 研究主題

『自ら学び、基礎・基本を身につける子どもの育成』
～わかる・できるを実感させる

授業づくりを通して～

2 研究仮説と成果

仮説1 「学習指導において、効果的な「学び方」を全校的に確立し、発達段階に合わせて各学級、各授業で実践することにより、進んで学ぶ意欲的な子どもになるであろう。」

まず「浜スタ6カ条と学びの5カ条」を設定し、全校統一のルールとして学習規律の確立のために実践に取り組んできた。その結果、授業を受け入れる学習姿勢が身に付き、課題解決に集中して取り組む姿が見られるようになった。

仮説2 「授業づくりにおいて、確実に身につけたい基礎的・基本的な学習内容を明確にし、1単位時間または単元構成の指導法を工夫することにより、基礎的・基本的な学習が身につくであろう。」

課題把握→個人思考→集団解決と定型化することにより、児童は見通しをもちながら主体的に学ぶ姿が見られるようになった。また基礎的・基本的な内容を明確にしたり、教材・教具の工夫としてホワイトボードを活用した言語活動を取り入れたりすることにより、児童は安心して課題解決を進められるようになり、主体的に自立解決や集団解決する姿が見られるようになった。

仮説3 「授業作りにおいて、他者とかかわりながら、個に応じて意欲につながる評価活動を工夫することにより、自信を持って仲間とともに学びあえる子どもになるであろう。」

自己評価・相互評価の実践に取り組んできた。授業で「いいねカード」による他者評価や観点を定めた自己評価を行うことで、児童の学習意欲が



高まり、自信を持って仲間と共に学び合う姿が見られるようになった。

その他の成果として、教師個々の授業実践を開いて授業づくりについて充実した研修を行うことができた点や小規模校の特徴を生かし「全校で取り組む」、「6年間で育てる」という視点で授業づくりを進めることができた。

3 今後の課題

「学び方」や「複式授業の展開」について各教室での実践を、全校的な実践へと高めていくことや小規模地域の特性を生かし、近隣校との連携の強化や小中連携への取り組みを充実させること。

〈第2分科会:猿払村立浅茅野小学校・芦野小学校〉

1 研究主題

『小規模校で児童を変容させるための
集合学習はどうあるべきか』
～集団での活動を通して自己を
高め連帯感を育てる～

2 研究仮説と成果

仮説1 「集合学習を計画的に実践することにより、集団での活動を必要とする内容を達成することができるだろう。」

はまなす体育を実施することで集団での活動でないと成り立たない体育もローテーションを組んで行うことができた。



仮説2 「少人数による単純な人間関係が集合学習を通して高められることにより、社会性の育成に役立つであろう。」

集団での活動を通して、自分の役割を認識していくことが見られるようになった。

仮説3 「チームティーチングの特性により、学習指導の充実を図ることができるだろう。」

一般的なTTとは趣を異とする小規模校ならではの役割分担の明確化を重点として取り組み、T1 T2 T3の円滑な連携を模索してきた。

今年度より「はまなす学校」は芦野・浅茅野の2校体制となり、改めて両校で集合学習を計画的

に進めてきた。公開授業では、以前より両校で取り組んできた集合学習（はまなす学校）によって2校の児童の関係が良好である点が長年の成果として評価していただいた。授業の中に設定した、コミュニケーションの見取りの場面をより明確化することで、T1、T2、T3の連係が深まり、児童の円滑な発表活動に結びついていくのではとの意見もいただいた。今回設定したコミュニケーション4領域に関しても活発な意見が寄せられた。

3 今後の課題

今までに至る両校の取組を更に次年度も進めていく中で、小規模校同士の集合学習におけるコミュニケーション能力の更なる向上に努めていかなければならない。

〈第3分科会：浜頓別町立頓別小学校〉

1 研究主題

『学び方を身につけ、

見通しをもって意欲的に学ぶ子どもの育成』
～複式学級における算数科授業づくりを通して～

2 研究仮説と成果

仮説1 「導入において、問題提示を工夫し問いを持たせたり、課題解決への見通しを持たせたりすることで、意欲的に取り組む子どもを育てることができるであろう。」

課題解決に向けて見通しを明確にすることで、課題解決への意欲を持続できる子どもが増えてきた。

仮説2 「課題解決の段階において、個や共同で考える手立てを効果的に設定することで、友達と交流し、考えを認め合える子どもを育てることができるであろう。」

学習リーダーを中心に互いの考えを練り合うことができるようになり、多様な解決方法を導くことにつながったり、さらに効果的な解決方法を見つけたりすることができるようになった。



仮説3 「まとめにおいて、自己の学びを振り返る手立てを工夫し、適切に評価をすることで、学び方

を身につけ、課題を解決できる子どもを育てることができるであろう。」

学び方を意識して学習したり、意欲的に課題を解決したりすることができるようになった。

研究協議では、討議の柱を①を「問いや見通しをもたせることで、意欲的に取り組めたか」②を「個や共同の考えを工夫することで、考えを深めていたか」とし、協議を進めた。①については、「必要感をもたせる課題設定」、「見通しをもった課題解決の方法」、「ヒントカードの活用」などの意見や感想が出された。②については、「学習リーダーを中心とした子どもの意見交流」、「集団思考での深め方」、「授業の終末におけるまとめの方法」などの意見や感想が出された。

3 今後の課題

助言者からは、「学習意欲をもたせる見通しについて」、「ノート指導」、「算数における言語活動」、「6年間を見通した指導(学び方スタンダードの活用)」、「子どもの思考を深める教師の支援」、「効果的な算数的活動」などについて講評をいただいた。

〈第4分科会：枝幸町立乙忠部小学校〉

1 研究主題

『確かに表現できる子どもの育成を目指して』
～国語科における言語活動の充実を通して～

2 研究仮説と成果

仮説1 「単元の指導計画において、指導事項に応じた単元を貫く言語活動を位置付けることで、子どもは、発達段階にふさわしい言語能力を身に付け、自信をもって表現することができるだろう。」

並行読書型の単元構成のもと、その単元で付けたい力を明確にした単元を貫く言語活動を設定し、1単位時間における言語活動の位置付けを意識した授業づくりに取り組んだ。また誰が担任になっても実践できるよう、指導事項「読むこと」の指導計画を完成させた。

並行読書型の単元構成により、子どもは「読みたい」「伝えたい」といった主体的な思いが高まり、文章を目的に応じて読むことを意識できるようになった。

仮説2 「単元や1単位時間の授業の中で、言語活動の意図を明確にして提示することで、子どもは、5つの言語意識（相手、目的、場面・状況、

方法、評価)をもって学習を進めることができるだろう。」

言語活動において、特に相手と目的を明確にして、単元の初めに学習のゴールを示した。

このことにより、子どもは「誰に」「何のために」を意識し、学習の見通しをもち、目的と必要感をもって取り組むようになった。

公開授業で、低学年は並行読書でお気に入りの一冊を選び、大好きな場面の会話を想像して書いた「マイふきだし」を入れて音読発表をした。お面をかぶることで、登場人物になりきって気持ちを想像し、考える時間を十分に保証することで、じっくりと考え、自信をもって自分の考えを発表することができた。5年生は自分の選んだお気に入りの一文について、



友達のを認め合いながら自分の考えを広げ深めることができた。

6年生は並行読書の作品から心に残った場面の優れた

3 今後の課題

並行読書の選本についての研究・整理、図書館との連携などによる情報発信と、年間指導計画における配列の工夫により、さらに子ども一人一人の「読む能力」の育成を図る。

〈第5分科会：豊富町立兜沼小中学校〉

1 研究主題

『主体的に学び、

考えを伝え合うことができる子どもの育成』

～言語活動を活かした授業づくりを通して～

2 研究仮説と成果

仮説1 「学習過程を明確にし、意欲を高める課題提示や発問・指示を工夫することにより、主体的に学ぼうとする力を高めることができるだろう。」

仮説2 「言語活動を活かし、話す・聞く活動やノート、まとめの指導を工夫することにより、考えを伝え合う力を高めることができるだろう。」

視点1では、少人数でも考えを深めさせるため

の個に応じた学習指導の工夫を重点にして、「友達ノート」「児童間交流」の実践を進めてきた。子どもたちは授業の流れを理解し、見通しを持った学習をできるようになってきた。視点2では、解決努力の段階において、学習用語や式、図などを使い自分の考えを書く取り組みに重点を置いた。子どもたちは、考えを早くまとめたり、友達の考えや思ったことなどを書いたりすることができるようになってきた。

研究授業では、1・3年生での1人で考えを深めさせるキャラクターや友達ノートの活用、5・6年生での共通点・相違点を観点にして考えを深める児童間交流などの手立てにより、子どもたちが自分以外の考え方にも触れ、考えを深めていく効果的な活動につながり、図や式を使って自分の考えや他の考えを自分の言葉で説明することができていた。また、児童の活動は学習規律や各段階での問題解決の進め方が身につけてきていて、日常の実践の積み重ねに対しての評価を得た。

3 今後の課題

一単位時間に身に付けたい力を着実に習得する授業展開、評価の観点を反映した活動内容の工夫、問題・課題に正対したまとめの設定など、さらに整理し、目標により近づく授業づくりを進めていくことが課題である。



〈第6分科会：幌延町立問寒別小中学校〉

1 研究主題

『深く考える子の育成』

～言語活動の充実を通して～

2 研究仮説と成果

仮説 「国語科『読むこと』において、一人一人に身に付けさせたい力を明確にした指導計画の工夫や、学びを高める学習活動の工夫をすることによって、主体的に学び、言語感覚が磨かれ、深く考える子どもを育てることができるであろう。」

検証のため研究内容を2点設定した。

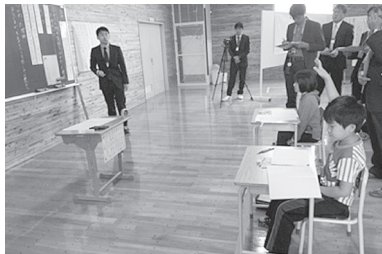
研究内容1では、教材の特質を適切に把握し、単元のねらいに即した言語活動の充実を図った。単元構成に単元を貫く言語活動を位置づけ、単元

を一次、二次、三次に分け、言語活動の指導の意図を明確にした指導計画を作成した。また、教科書教材と言語活動をつなげる方法として、入れ子構造ではなく、ABワンセット方式を取り入れた。このことで、一単位時間内で、A（教科書教材の学び）の授業を行う学年は、直接指導中心の授業を展開し、B（自分で選んだ本の読み）の授業を行う学年は間接指導中心の授業を展開でき、子供の主体的な学びが保障されるよう工夫を図った。

研究内容2では、課題解決の場で、教師が用意した架空のクラスメートを登場させ、多方面から考えを取り入れさせる話し合いの場を設定した。

研究協議では、討議の柱を「①主体的に学ぶ子供を育てる指導計画作り」「②学びを高める学習活動の工夫」として進めた。「ABワンセット方式の可能性を見出した授業であった」「架空のクラスメートの存在が見事」「子どもの体験や経験のどこから理由付けをしているか引き出せると良かった」など意見や感想が出された。

助言者からは、「『誰に』『何を』『どんな』を明確にすること」「子どもの手元に残るまとめをしていくこと」「関連図書の扱いを年間カリキュラムに落とすこと」などについて講評をいただいた。



3 今後の課題

ABワンセット方式で授業を行う場合、Bの学習は間接指導中心となるため、児童の主体的な学びを保障し、授業のねらいを明確にするためには、具体的に目指す子どもの姿を設定することが必要となる。

〈第7分科会：礼文町立香深井小学校〉

1 研究主題

『自ら考え、かかわり合い、
伝え合う子どもの育成』
～楽しくわかる授業づくりを通して～

2 研究仮説と成果

仮説1 「導入において学習内容への期待感を高めることにより、自ら課題を持ち、意欲的に学習に取り組ませることができるだろう。」

身近な題材を取り上げたり、解決したいと思える課題を取り上げたりすることで、学習内容への期待感を高めることができた。

仮説2 「個に応じた指導を充実させることで、学習内容を正確に理解することができるだろう。」

小規模な学校であるが、様々な課題を持った児童が在籍している。指導案の中に個別の支援計画を位置づけ、予想される困難と手立てを記載したことで、事前に個に応じた支援の手立てを用意することができた。極小規模だからこそ、きめ細やかな個への支援を実施することができた。児童アンケートでも授業への評価は高く、個に応じた支援の成果が表れていると考えられる。

仮説3 「人と関わり多様な意見に触れることで自分の思考を深め、思いや考えを自分の言葉で伝えることができるだろう。」

極少人数の授業においても他者との関わりを作るため、「架空の友達」による意見や他学年の児童の書いた作文を紹介した。他者の意見に触れることで思考を深めることができた。一人学びの児童も、他者の意見を参考にすることで自分の意見を持ちやすくなった。

3 今後の課題

他者との関わりについては、さらに言語力を伸ばすことでコミュニケーションの内容を



高める必要がある。また、一人学びの児童への手立ては充実していたが、複数いる児童の間の関わりという面では課題が残った。さらに、効果的に授業を組み立てるための複式授業での単元配列を工夫していく必要がある。

〈第8分科会：利尻町立仙法志小学校〉

1 研究主題

『学力向上に向けた複式校における組織的取組』
～複式理科の効果的な授業づくりを核として～

2 研究仮説と成果

仮説1 「カリキュラムの工夫や授業のパターン化(効果的なわたり・ずらし)、学習環境の整備などによる、効果的な複式理科の授業づくりを再確認し、それらの実践の成果を他教科にも拡げること全

体的な学力向上につなげていけるであろう。」

指導過程のパターン化を図ることによって、見通しを持たせながら学習を進められるようになってきた。また、「おもしろ理科教室」の定期的開催や「おもしろ理科コーナー」の設置により、理科に触れる機会が多くなり、理科への関心が高まった。

公開授業では、児童が自ら実験の準備や片付けを行うことができ、理科室環境整備の成果を参観していただいた。



仮説2 「授業における話し合いや発表を核として、学校生活全般における児童のコミュニケーション能力（聞く・話す・伝える）の向上を図ることで、個々の良さや可能性、集団の自主性や積極性が育つであろう。」

全校学習室での活動により、全校で統一した学習規律の指導を積み重ねることができた。また、全校の前で話す機会を多く設定することで、発表する機会がどの児童にも与えられ、話すことへの抵抗を感じる児童が減ってきた。公開授業の参観者が多い中で、それぞれが発表できたことは、児童の自信につながった。

3 今後の課題

間接学習の交流場面では、誰でもリーダーとなり、中心となってそれぞれの考えを出し合い、まとめていく力をつけることや、課題を早く終了した児童には、補充的な内容・発展的な内容・他の児童への支援などの中から、その場にに応じて判断し、学習を進められる力をつけることが課題である。

話すことへの抵抗はなくなってきたが、「共感しながら聞く、大事な事を落とさず聞く」という話の聞き方を継続して指導する必要がある。

〈第9分科会：稚内市立宗谷小学校〉

1 研究主題

『意欲的に学び、自ら表現できる子どもの育成』
～共に考え、表現し、練り合う授業づくり～

2 研究仮説と成果

仮説1 「課題設定や課題の提示の仕方を工夫したり、授業の中でICT機器を効果的に活用した

りすることによって、じっくり課題解決に取り組み、意欲を持って活動する子どもを育成することができるだろう。」

①単元を見通し、その単元でつきたい力をしっかりと見極め、その上で児童がじっくりと課題解決に向き合える課題を設定した。子ども達が「やってみよう」「解決したい」と思える課題の設定や課題提示の仕方を工夫した。②課題を解決していくために見通しを持たせてから自力解決へ望めるような手立てや、解決するための支援の方法を工夫した。③iPadや実物投影機を積極的に有効活用する取組を行った。

仮説2 「自分の考えを持ち、伝え合う時間を保障し、練り合いの方法を工夫することで、自他の考えを伝え合い、高め合う子どもを育成することができるだろう。」

①考えを伝え合う練り合う場の設定・系統的な練り合いの指導。②何をゴールにして練り合うかの明確化。③学習リーダーを中心とした活動の充実に取り組んできた。

研究協議では、子どもの「話そう」「聞こう」という意識が伝わってくる。学校全体として教師間で同じ目標に向かって一致した取組ができています。話し合いのルールや机上のルールがしっかりとパターン化していて、授業の流れが子どももわかり、安心して活動することができています。6年間を見通した土台としての力を身につけている。実物投影機が有効に活用されていた。実物が見えることにより子ども達が意欲を持って取り組むことが出来ていた。また、練り合いをしていく有効な手段であった。などの意見が出された。



3 今後の課題

ICTはいつでも、だれでも、どこでも使えることが大事。ICTを使ったときに、子どもの記録用なのか、メモ用なのかははっきりさせると良い。



次期開催地から 第65回全道へき地複式教育研究大会渡島大会

渡島での学び合いに、皆様のご参加をお待ちしています

第65回全道へき地複式教育研究大会渡島大会実行委員長 **岩崎 透**

「最北の風薫る宗谷の海と大地に生き 未来を担う子らに 豊かな心と確かな学びを！」の大会スローガンのもと開催されました、第64回全道へき地複式教育研究大会宗谷大会が、全道各地より多くの参加者を迎え、成功裏に終わられましたことに、心より敬意を表しますと共に、大会成功に向け、ご準備頂きました実行委員会の皆様、各学校の教職員の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、平成28年度の大会は、夜景の街函館市を主会場に、渡島管内での開催となります。

9月29日(木)の全体会と分散会を函館市、30日(金)の分科会は1市5町の9会場で行います。昨年度の十勝大会から始まりました「第9次長期5か年研究推進計画」の成果を引き継ぎ、更なる充実を図るため、準備を進めているところです。

3月の新幹線開業に活気づく北斗市、豊かな自然で自然美術館と称される八雲町、秀峰駒ヶ岳を望む森町、七飯町等々、雄大な自然に抱かれ、元気に活動する子どもたちの姿をぜひご覧頂き、多くの貴重なご示唆を頂けますよう、実行委員会一同、心よりお待ちしております。

■渡島大会スローガン

**伝統に息づくロマン溢れる渡島の大地から
未来を創る子らに 確かな学びと豊かな心を！**

■開催期日 平成28年9月29日(木)全体会・分散会／30日(金)分科会

分科会	会場校	研究主題 ～副主題～	分野・課題教科等
1	松前町立小島小学校	基礎・基本を身に付け、主体的に学ぶ子どもの育成 ～基礎・基本の定着を図る指導方法の工夫～	学校学級経営3及び学習指導6
2	知内町立涌元小学校	ともに学び、磨き合い、高め合う子の育成を図る学習指導の工夫 ～主体的・協働的な学びを育む授業を通して～	学習指導2・7算数科
3	北斗市立島川小学校	自分の思いや考えを深め、豊かに表現する子の育成 ～言語活動の充実を図り、少人数学級における的確な支援を通して～	学習指導7国語科
4	七飯町立峠下小学校	進んで自分の考えをもち、伝え合い高め合う子どもの育成 ～意欲を高める学習過程の工夫を通して～	学習指導6算数科
5	七飯町立大沼小学校	主体的に学び、ともに考え、伝え合う子の育成 ～各教科における言語活動の充実を通して～	学習指導6・7全教科・領域
6	森町立濁川小学校	自分の考えをもって主体的に学ぶ子供の育成 ～国語科における「読む力」を高める授業づくりを通して～	学習指導6・7国語科
7	八雲町立東野小学校	自ら考え、自らの学びを高めていく子どもの育成 ～算数科における学び方の指導の工夫を通して～	学習指導6算数科
8	八雲町立野田生小学校	自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもの育成 ～算数科の基礎・基本となる学習を通して～	学習指導6・7算数科
9	八雲町立山越小学校	豊かな言語活動を通じた確かな読みの力の育成 ～国語科「読むこと」領域における単元を貫く言語活動の充実を通して～	学習指導6・7国語科